

洵に多かれと切望するのみなのである。(定價五拾錢、教養文庫
110、弘文堂發行(西井克巳))

印度洋問題

伊 東 敬著

印度洋に關することが一般人の注目を惹き出したのは本年三月末より四月初にかけての帝國陸海軍の印度洋作戦開始以來の事であらう。それはシンガポール占領、ジャワ裁定が契機となつたもので、アンダマン諸島官領に始まり、コロンボ急襲が之に續いた。營業本位の諸雜誌が慌て、印度及び印度洋に關する何らかの記事

を求め出したのはこの頃である。しかしその多くは印度本土に關するものであつた。印度に就いては研究者が甚だ多い。また研究とまで稱し得ずとも之に關心を持ち、或は一度旅行した経験を有し、何らかの機會に發言したいと待機してゐる人もまた少くない。印度に關する單行本が輩出し出したのもこの頃で、それは驚くべき多數に上り、他の南方諸地域に關する出版物に比し遙かに多いやうに思はれる。多くは「神祕の國印度」といふやうな見出しに始まり、地勢、氣候、民族、宗教、産業、貿易等を一通り解説し、最後に對英關係を持つて來るといふ行き方である。紀行文も多く出された。譯書も出た。K. S. Shetyankar の The Problem of India の如きは二種の翻譯をへ出てゐる。このやうな印度關係書の氾濫の中にあつて、僅かに光つてゐるのは脇山康之助氏「現代

印度の諸問題」、綜合印度研究室編「印度の抗戦力」ぐらゐのものであり、その立場に於ていさゝか承服し難いところありとするも他に比して眞面目な仕事であることは認めてよろしからう。

このやうな印度關係書、それも大同小異のもの、氾濫——それは出版文化協會の統制の存在を疑はしむる程度のもので——の中にあつて、印度洋と名の付く書は一冊も現はれ出なかつた。従來印度洋は我々日本人にとつて何となく裏側の感じがあつた。それはヨーロッパへの通路であつたが、太平洋に於けるが如く幾多の問題を含むとは思へなかつた。換言すれば、それ程イギリス支配が決定的であり、イギリスは印度洋帝國と言はれ、印度洋はイギリスの湖水であつて、そこに問題の發生など望むべくもなかつたのである。獨伊の西方よりの攻勢も未だにこの形勢を打破することが出来なかつた。大東亞戰爭の開戦は一瞬にしてイギリスの印度洋に於ける地位に決定的打撃を加へた。こゝに始めて印度洋問題が發生したと稱しても差支へあるまい。今まではたとへ問題が存したとしても、それはイギリスの問題であつたのであるが、之からはそうではない。

かゝる際に伊東敬氏の「印度洋問題」が出された。同じ著者による「現代印度論」は一昨年十二月の出版であるが、現在の多數の印度關係書の先驅をなしたもので、極めて常識的ではあるが、穩健概ね正鴻を逸せぬ好著として文部省推薦となり、其後出版された同種の書でこれに及ぶものは少い。私は印度關係書なる言葉を使ふけれども、之は印度に關する邦語文獻が未だに少しも専門化さ

れて居らず、一般的教育の書のみで、之を一轄して印度關係書と稱しても少しも差支へない程度のものであるからである。「印度洋問題」は「現代印度論」の姉妹篇とも言ふべきであらう。そして「現代印度論」と同じく印度洋關係書の先驅となつた。その内容は印度洋の大勢、濠洲の諸問題、東北印度洋の諸問題（蘭印、馬來、ビルマ）、印度の諸問題、印度洋島嶼の諸問題、西化印度洋の諸問題（エーデン、英領東アフリカ、モザムビーク）南阿の諸問題、印度洋に於ける英國の諸問題、印度洋の今後の各篇に分れる。そして之は印度洋をめぐる各地域の社會、經濟、政治情勢の概説であり、著者が元來英帝國研究家である故か、主として之等の諸地域のイギリスによつて支配されつゝあつた過去の狀態の解説に意をそそぎ、イギリスの内海印度洋の姿を述べ盡して餘すところがない。最も私が期待したのは最後の印度洋の今後であるが之には僅か十一頁が當てられてゐるに過ぎず、それも問題の核心を突くとなくして、徒らに省みて他を言ふことの多いやうな氣持を懷かされたのは私だけであらうか。末尾は「印度洋と我が日本」なる一節であるが、之は單に印度洋大勢の變化を知らずして今後の印度洋を論ずる勿れとの忠告的文章が二頁を割いて述べられてあるのみで、甚だ讀者をして失望せしむる。要するにこの書は「印度洋問題」なる名を借りて、印度洋をめぐる國土と住民の解説を取扱つたものに過ぎず、甚だ問題性に乏しい。印度洋内及び周邊諸地域に於けるイギリス侵略の姿は之によつて充分知り得るし、濠洲蘭印、馬來、ビルマ、印度、東阿、南阿に就いて一冊の書で短時

間に知らうと思へば、之に勝る書はない。たゞアジア的印度洋の姿に就いて、今後の印度洋と日本との關係に就いて今少しく教示するところがあつたらと考へるのである。

大東亞戰爭は進行しつゝあり、戰果は印度洋にも及んだ。伊東氏の言を借りるならば、「西南太平洋と印度洋とを結ぶマラッカ海峡とスンダ海峡に於ける人為的堰堤が、皇軍果敢の行動により全く取除けられ、今や南大洋は期せずして一體化しつゝある。」その一體化が如何なる指導方針の下に行はるべきかに就いては、更に明かにさるべきであらう。（大和書店刊、B6版、三七七頁、昭和十七年六月十五日發行、定價二・三〇）（淺井得一）

北極と南極

小牧實繁著
川上喜代四著

（小牧實繁教授監修、世界地理政治大系第十五卷）

現在國民の關心が南方地域のみ焦點づけられてゐる時、「世界地理政治大系」は「南領印度」、「印度支那」に引續き第三回の配本として突如「北極と南極」を吾々の前におくつた。此處に本大系の企畫の高き獨自なる指導性と此の「北極と南極」の意義の重要性の存することを吾々は先づ認識せねばならぬであらう。

まことに、嘗ては世界の見藥てられた邊隅としてのみ觀念せられ、現在なほ氷雪に鎖されたと輕率にも信ぜられ勝ちな此の兩極地方が、新しき世界政治の上に如何に重要な意義を有するか、